

〔講演要旨〕 越後古代図に見る津波記録の検証

河内一男

§ 1. はじめに

新潟県中・北部で江戸期以降発生してきたM6.5以上の被害地震は時系列で、1670年西蒲原地震(M6.8)、1762年佐渡北方沖地震(M7.2)、1802年小木地震(M6.5)、1828年三条地震(M6.8)、1833年庄内沖地震(M7.5)、1964年新潟地震(M7.5)、2004年中越地震(M6.8)、2007年中越沖地震(M6.8)である。単純平均で50年に一度の割合で発生してきたことになるのだが、室町期以前に遡ると信頼できる文字史料はほとんどないため、全体像は判然としていない。そもそも1670年の地震や1762年の地震でさえ、記録が少ないこととその記録の読み違えから最近まで実像が明らかでなかった。

§ 2. 越後古代図

「天津波アリテ西北榎島始メ孤島打壊シ泥砂乗足島ノ東南ノ入海ニ注ケリ是ヨリ大ニ国ノ形ヲ一変化セリ」という添え書きやその描くところの海岸地形から古代の地震や津波被害を示唆する康平図あるいは寛治図と呼ばれる平安中期の康平三年(1060)、寛治三年(1089)調製とされる越後国地図がある。現存するものは全て後世の模写図である。

この古代図についてはこれまで評価が分かれており、大木金平(『郷土史概論』, 1921)並びに池田雨工(『越後古代史の研究』, 1925)が模写図であっても古代の地形を示唆しているとして資料価値を認めているのに対し、金塚友之丞(『新発田概論』, 1937)は「偽図であり一顧の価値もないもの」と断じているほか、図中の地名や添え書きの矛盾を根拠にこれに追随する考えが少なくない。

榎根勇(『越後平野の1000年』, 1985)は、想像力でこのような図を創作できるとは考えられないとし、「(原図が)いつの時代に描かれたものかわからないが、もしも口碑伝説の類と相違するところがあれば、これらの図はその時代に偽作として退けられ、今日まで伝わることはなかったのではあるまいか。交通不便の往時、何らの根拠もなしに想像だけでこれだけの地図を描いたとは、(地理学者としての)私にはどうしても考えられない」として、大木や池田の

考えを支持している。なお、堀健彦(2010)は現存する模写図を詳細に分類し、模写の経過について分析している。

§ 3. 古代図と海岸地形の変遷

大木金平(1921)は『紫雲寺新田由来記』という旧記にある「七十三代堀川院、寛治六年戊辰、天津波大地震、蒲原、岩船陸地となる」という記述に注目し、この地方で発見される埋没樹を津波と関連づけて論じた。埋没樹の多くが根つきで大量に発見され、同方向(根を東に)に向いているのは津波による可能性がある、というものである。この地には他にも津波伝説が多い。胎内川の津波の遡上(旧黒川村史『夏井円福寺縁起』)、埋もれ木と越の津波伝説(旧笹神村史)、旧岩船潟の七湊伝説(村上市史)などである。

鴨井ほか(2006)は新潟砂丘の形成史に関連して埋没樹の¹⁴Cによる年代測定結果を報告した。このうち、現在の汀線に近い新潟東港、胎内川河口、瀬波海岸で発見された泥炭ないし埋没樹はいずれも¹⁴Cで2000年前後を示し、この時代に旧汀線の沖合からの後退があったことを窺わせて興味深い。

越後では「ゆ」が「よ」に転訛する。康平図から、この転訛の経過を読み取ることができる。

すなわち「ゆり田→与田(与板)」「ゆり潟→寄る潟(よらい潟)」である。他の資料で「揺り上げ→汰上げ^{より}」があるのでこのゆりも揺りであろう。

§ 4. おわりに

この度の大災害で各種の被害想定が低めに見積もられていたことが明らかになった。研究者の立場としても、史料の正確さを追求するあまり過去の活動を過小評価してしまう弊をおかしてはいなかったらどうか。

記録の少ないことが地震の少ないことになっては、防災面ばかりでなく地震テクニクスを考える上でも不都合である。良好資料のない場合は、俗説口碑の類いでも「教えられる所、暗示を受ける点が多い(池田雨工)」として価値を見出したい。最悪の事態を想定することも、ときに必要なのだから。